

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02643

研究課題名(和文) 学校音楽カリキュラム経験の国際比較 教科学習経験産出装置としての学校音楽文化研究

研究課題名(英文) An International Comparative Study of School Music Curriculum Experiences :A Study of School Music Culture as a Constructive Device for Curriculum Learning Experiences

研究代表者

笹野 恵理子 (SASANO, ERIKO)

関西外国語大学・英語キャリア学部・教授

研究者番号：70260693

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：学校音楽カリキュラムは、当事者である子どもに実際にどのように経験されるのか。この問いに支えられて、本研究の目的は、学校音楽カリキュラム経験とその構成過程を解明しようとする。教科学習経験は、学校の多様な音楽文化の相互作用から編み直されることを仮説として、国際比較の観点を導入して、研究を展開、発展させようと試みるのが研究着想時の課題であった。新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、国際調査の展開が危機的なものとなったため、研究計画を若干修正し、「制度化されたカリキュラム」の検討、日本の学習者の幅広い年代への調査に研究の重点をおいて、上の課題を追究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として次のことがあげられる。

第一に、本研究の知見は、これまで「制度」の「教授-学習」の枠組みを前提に展開されてきた学校音楽教育研究、ひいては教科教育学研究を広角化し、「教科文化研究」といった新たな研究の地平を切り拓く。第二に、学校音楽のインフラストラクチャーに焦点をあてる本研究は、制度化されたカリキュラムと学習経験のズレがなぜ生じるかを解明し得る。第三に、本研究は、学校音楽(教育)の意味と効果を問い直す。当事者の「語り」を、「相互主観的」に共有し、「共同」の「物語り」として再構築することで、コミュニティ自体を変容させていくことができるならば、学校音楽教育の可能性を大きく拓く。

研究成果の概要(英文)：How is the school music curriculum experienced by the children involved?

This is the research question of this study. Based on this question, this study attempts to elucidate the school music curriculum experience and its composition process.

In my previous studies, I have empirically clarified the characteristics of "collective cooperativeness" as the "school music curriculum experience" of Japanese children. The applicant has also hypothesized that the curriculum learning experience is knitted together from the interactions among the various musical cultures of the school. In the present study, we intended to develop the research by introducing an international comparative perspective, but the Covid-19 pandemic forced us to revise our research plan. The following research focuses: 1) examination of the "institutionalized curriculum," 2) survey of a wide range of ages of learners in Japan.

研究分野：音楽教育学 カリキュラム経験研究

キーワード：学校音楽 カリキュラム経験 教科学習経験 学校音楽文化 経験されたカリキュラム 国際比較 生きられたカリキュラム 回顧的カリキュラム

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1) 本研究の研究課題の中核をなす学術的「問い」

本研究の最も根本的な「問い」は、先に示した次の1点である。すなわち、学校音楽カリキュラムは、当事者である学習者にどのように経験されるか、という点にある。本研究では、この当事者である子どもの学校音楽における学びの経験を学習者の「学校音楽カリキュラム経験」と呼んで、対象化し、その経験が構成される過程とメカニズムを解明しようとするものである。よって本研究の全体構想は、学校音楽カリキュラムを、「文書化」され「計画化」された紙の上のレベルでなく、学習者の経験のレベルから把握しようとする。

申請者は、以下「2 - (5)」においても述べる通り、これまでの研究において日本の子どもの学校音楽カリキュラム経験として、「集団的協同性」の特徴を実証的に明らかにしてきた。そしてその教科学習経験は、学校の多様な音楽文化の相互作用から編み直されることを仮説として指摘した。そこで本研究課題においては、上記の日本の特質をより相対的な視野から検証し、仮説を強固なものとするため、国際比較の観点を導入して、研究を展開、発展させようとしたものである。

2) 本研究の研究開始当初の学術的背景

(1) 申請者は、これまで一貫して学校音楽教育における潜在的カリキュラム研究ならびにそこから着想された「カリキュラム経験」研究を展開してきた。その継続研究として、本研究が着目する鍵概念は、「潜在的カリキュラム」である。潜在的カリキュラムの発見は、近年のカリキュラム研究の大きな成果である (Jackson, P.W.)。本研究は、潜在的カリキュラムが明らかにした「教育意図と学習経験の乖離」に着目し、当事者が「実際に学んでいる内容」、言い換えれば教科学習の「意味の再構成過程」に関心を払う。

(2) 近年のカリキュラム研究において、カリキュラムは「学習経験の総体」としてとらえられるようになってきている。それは、潜在的カリキュラムが、「教えられた内容」と実際に「学ばれている内容」のギャップを指摘したことによるといわれる (松下 2007 田中 2000)。端的にいうと、この概念の再定義とは、「教育計画としてのカリキュラム」と「学習経験」の関係の問い直しであった (佐藤 1996 松下 2000 木原 2000 など)。

(3) 教科教育学研究、とりわけ音楽科教育研究においてそのカリキュラム論は、これまで伝統的に、当該教科における教科内容編成方法論に主要な力点がおかれてきたといえる。しかし、ここで今一度ある意図において編成された教科カリキュラムを、子どもの「学習経験」という視点から捉え直してみるならば、教科内容の編み直しが、直にカリキュラムに埋め込まれた「教育意図」通り、「学習経験」を編み直しているか、を問うことができる。

(4) すなわち、カリキュラムの「実質」は、当事者の視点から具体的経験に肉迫しなければ、十分に解明されない (Erickson, F & Shultz, J. 1992, Pollard, A. 1998 など)。教科カリキュラムにおいても、子どもの「学び」の具体的経験を解明してこそ、当該カリキュラムの効果や成否を確認でき、教科学習の「学び」の意味を明らかにし得る。

(5) 以上の課題意識にたつて、申請者は、これまで以下のことを明らかにしてきた。

<p>校音楽カリキュラムを「伝達されたカリキュラム」(教師)と「経験されたカリキュラム」(学習者)の別個の視角から解明する研究枠組の構想 (笹野 2012 など)</p> <p>②「経験されたカリキュラム」における日本の教師の経験内容構造の解明と経験産出過程の解明 (笹野 2011、2009 など)</p> <p>「経験されたカリキュラム」における日本の子どもの経験内容構造の解明と経験産出過程の解明 (笹野 2015、2014、2013、2012 など)</p> <p>日本の大学生の回顧による経験の意味付与と経験が編み直される過程の解明 (笹野 2014 など)</p> <p>日韓の比較考察による学校音楽カリキュラムの特質の解明 (笹野 2012、Miyamoto et al 2011 など)</p>

そこで本研究課題では、これらの成果を踏まえ、その継続・発展的研究として、国際比較の観点を導入し、他国の学校音楽カリキュラム経験と比較考察することによって、日本の特質を検証するとともに、先の仮説をより強固なものとしたい。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学校音楽カリキュラムを当事者である学習者に「経験された」レベルから明らかにすることである。より具体的な課題は、以下の3点である。

学校音楽カリキュラム経験の解明 (実態の把握)

その経験を産出するメカニズムの解明 (メカニズムの解明)

理論モデルの構想 (理論構想)

3. 研究の方法

本研究課題では、これまでの研究成果を援用し、上の「目的」において述べた ~ の課題について以下の方法で追究する。

ナショナルカリキュラムの分析による「制度化された」学校音楽カリキュラムと、質問紙調査による児童生徒の経験内容構造の解明 (統計的分析、主に因子分析による)。

学習者ならびに教師へのインタビュー調査と質問紙調査における自由記述の分析（テキストマイニングソフト KHCoder を用いた内容分析）による経験産出過程の解明。
カリキュラム類型を明らかにし、学校音楽文化理論（仮）として構想。

4. 研究成果

本研究においては、研究計画当初に予測し得なかった新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、研究計画を修正せざるを得なかった。修正した大きな点は、国際比較研究の対象の限定である。「制度化されたカリキュラム」の解明 当事者の「カリキュラム経験」の解明と手続きをとらうとする本研究においては、研究開始初年度は調査対象としていた諸外国の「制度化されたカリキュラム」の検討ならびに調査票の作成をすすめるとともに、調査依頼等の予備的インタビューを開始したが、国際調査に入るまさにそのタイミングにおいてコロナ禍に見舞われることとなった。よって対象国の限定と研究枠組みの修正を行わざるを得ず、研究開始後当面は研究比重を日本の「学校音楽のカリキュラム経験」の解明におくこととした。

本研究が国際比較において検証すべき仮説は、教科学習経験は、学校の多様な音楽文化の相互作用から編み直される、というものである。そこで、この仮説を強固なものとするという当初の研究目的を達成することを主要な課題としつつ、国際調査が本応募課題の研究期間内で遂行できない場合も想定し、「制度化されたカリキュラム」の検討と、日本の幅広い年代の学習者の学習経験を解明する課題を同時並行的にすすめていくというフレームのなかで、研究を実施した。

本研究の見取り図として、申請者のこれまでの研究から導出された以下のモデルを作業仮説モデルに採用し、研究に着手した。

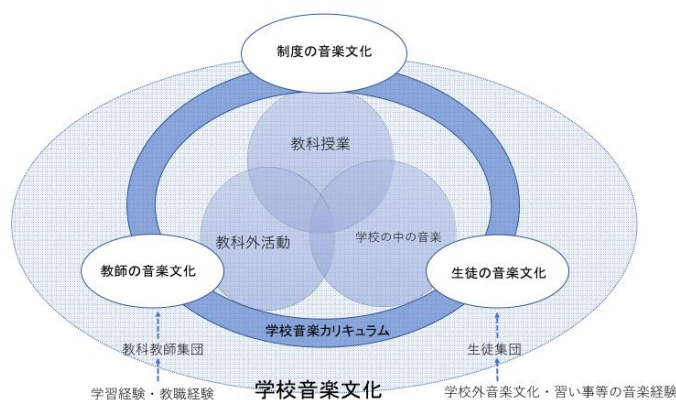


図1 学校音楽文化の構造（笹野 2021p.223）

研究期間において、コロナ禍によって国際調査の部分は十分な展開に至らなかったが、韓国、中国、イタリアの「制度化されたカリキュラム」については分析することができた。また日本の「学校音楽のカリキュラム経験」については、対象を国際比較でなく、年代比較に切り替えたことから、一定の成果を得ることができた。（笹野 2023）

本研究において最終的に明らかにされた研究成果は以下の通りである。

本研究から得られた知見の第一は、学校には豊かな音楽文化が存在し、児童生徒たちは、教科授業だけでなく、学校文化全体から学びを紡いでいる、ということである。学校音楽教育を「文化学習」として捉え、「当事者の経験」という視点から教育過程（educational process）をみれば、学校音楽教育には、「文化の授受」といったダイナミックな姿が存在する。学校音楽教育における「知」の伝達と受容の過程は、単線的で一律的、一元的なものでなく、もっと多元的、複線的、多方向的、可逆的、循環的で、ダイナミックで豊かである（Sasano2018 笹野 2021）。

教室で「経験」を編み上げるメカニズムとは、教科授業だけでなく、学校がもつ音楽文化（学校音楽文化）が下部構造に位置し、「経験」を構成する装置として機能している。学校音楽文化は、学校外の音楽文化との相互作用の中で学校外音楽文化を浸透させ、そうした多層的、多元的、複線的、可逆的な文化の構造の中で、人々は学校音楽（教育）の「経験」を編み上げる。（笹野 2021、2023）

第二に、児童生徒らは自身がこれまでに蓄積してきた学校外の音楽経験との相互作用から学校での学びの「経験」を構成するが、教師も、自身の音楽文化（経験）を学校に持ち込み、その相互作用から学校音楽経験を構成する。すなわち、両者はともに個々それぞれに「生きた」「当事者の文脈」から、学校音楽教育を「表象化」し、それぞれの意味世界の中で「経験」する。学校音楽（教育）の経験、すなわち学校音楽文化の経験とは、相互作用的であり、総体的な経験である。（笹野 2020）

第三に、それゆえ大切なことは、それぞれが立ち上げる「物語り」を、「相互主観的」に共有し、「共同」の「物語り」として再構築していく力と方途をもつことである。言い換えれば、学校音楽教育において、異なる立場の人々が共感しあえる「共有」の「語り」を生み出すことが大

切になってくる。本研究は、従来の研究が「個」の体験として、「個」の「物語り」として位置づけてきた音楽経験を、多様な学校音楽文化を多面的に描き出すことによって、「個」の体験に基づきながらも、「語り」を「共有」することで、立場が異なる人々の「共同」の「物語り」として再構築する可能性を秘める。(笹野 2022)

第四に、学校音楽教育において「制度」がオーソライズする「知」そのものが、すでにそもそも「価値中立」的でも、「普遍」的なものでもなく、相対的なものである、ということである。現在の「学校音楽教育」という形や姿も社会・歴史的に構成されたイデオロギーに媒介され、そのうえに成立している。すなわち、学校音楽教育には「絶対的」な「正しい」姿があるわけではなく、常に社会的・歴史的な文脈の中でさまざまなコンテクストにおかれ、その中で形を変容させ、継承されてきたものである。(笹野 2022 2023)

それゆえに「制度」の枠組みを自明視し、「客観的」で「絶対的」な「正しい」音楽教育の姿がともすると「ある」という無自覚な前提や先入見は、現実社会において学校音楽におけるノ学校音楽から「排除」される人々を生み出しやすく、またそうした人々のもつ文化は後景におかれやすい。「制度」が指定する標準的で一律的な学校音楽教育において、周辺におかれやすい人々の学校音楽文化は、ともするとメインストリームの学校音楽文化に消されてしまいやすい。ある人々の「学校音楽文化」が「周辺化」されていく過程を描くことを通して、「中心」におかれる学校音楽文化の特徴は明らかとなる。このことは韓国とイタリアの「制度化されたカリキュラム」が「経験」される過程において「ズレ」を生じさせることから明らかである。(笹野 2024)

そして第五に、周辺におかれやすく、排除されやすい人々が、その中で葛藤や衝突を繰り返しながら、「自分の」「学校音楽文化」の「物語り」を創り出し、固有の経験を編み直し、新たな学校音楽文化を生成していることも明らかにされた。本研究は、周辺化されるプロセスとメカニズムだけでなく、新たに「学校音楽文化」を形成していく過程にも着目し、当事者の「語り」を引き受け、それらの「声」を紡ぐことで、当事者の文脈から生成される学校音楽文化と、その生成過程を描き出すことに一定成功している。これらの記述は、質的研究の宿命として、当事者と研究者らのかかわりが歴史的・社会的文脈に埋め込まれている以上、常に書き換えられる暫定的な仮説的な結論の性質を免れない。しかしこうした当事者の「語り」を、「相互主観的」に共有し、「共同」の「物語り」として再構築することで、コミュニティ自体を変容させていくことができるならば、学校音楽教育の可能性は大きく拓かれる。(笹野 2023 2024)

以上の知見をまとめ、図1の当初の作業仮説モデルを基に、「学校音楽文化理論」として以下のモデルを示した。

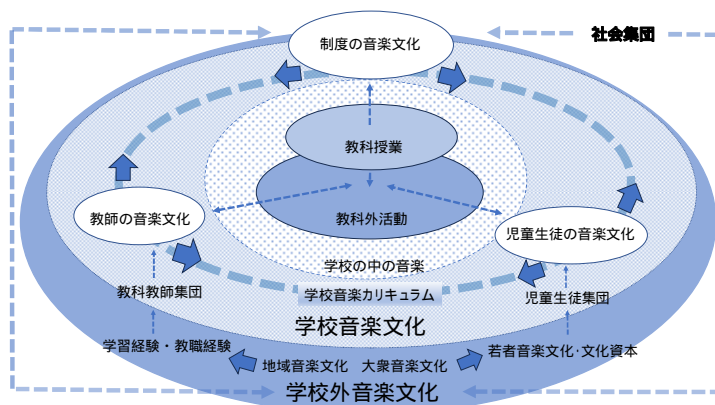


図2 学校音楽文化の関係構造 (笹野 2023b p.334)

コロナ禍によって本研究の中核となった国際比較研究の観点は十分な展開ができなかったが、今後の課題としたい。また逆にコロナ禍によって研究計画を修正したことによって、日本の学校音楽のカリキュラム経験研究については、幅広い年代からのデータを蓄積することで、一定の成果を得られた。このデータと国際比較の観点をとりこみ、今後も研究を展開させていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 笹野恵理子	4. 巻 51
2. 論文標題 題材の目標と評価をとらえた音楽科の授業設計とパフォーマンス評価	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『季刊音楽鑑賞教育』	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹野 恵理子	4. 巻 1（1）
2. 論文標題 教育課程の基準（学習指導要領）を教科教育学としていかに分析・評価するか 「カリキュラム経験」研究の視角	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教科教育学コンソーシアムジャーナル	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.60199/jjcospa.2022J001	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笹野恵理子	4. 巻 17
2. 論文標題 シニア世代の音楽学習者の「学校音楽のカリキュラム経験」 生涯音楽学習の視点からみる「回顧的」カリキュラム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『音楽学習研究』	6. 最初と最後の頁 35-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹野恵理子	4. 巻 1 2 3 8
2. 論文標題 学校文化を創造するカリキュラムマネジメント 学校音楽文化の継承と変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 6 - 1 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹野恵理子	4. 巻 35
2. 論文標題 「学校音楽教育におけるカリキュラム研究の課題と展望 『経験されたカリキュラム』への視角」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『関西楽理研究』	6. 最初と最後の頁 113-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eriko SASANO, Michiko KAN, Yukari YAMAZAKI	4. 巻 1
2. 論文標題 A Study of Inclusive Music Education in Elementary School: The Perspective of “Universal Design for Learning” in School Music Curriculum	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Development The Support Service System on Inclusive Education for Persons with Disabilities: International Experiences and Lessons Learnt for Viet Nam	6. 最初と最後の頁 29-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Eriko SASANO, Michiko KAN, Yukari YAMAZAKI	4. 巻 63/ 9AB
2. 論文標題 Inclusive Music Education Teaching Methods for Elementary School : The Perspective of “Universal Design for Learning”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 HMUE Journal of Sciences	6. 最初と最後の頁 134-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 榎下達也 ・ 多賀秀紀 ・ 小山英恵 ・ 笹野恵理子
2. 発表標題 音楽科の実践研究を問い直す
3. 学会等名 日本音楽教育学会第53回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笹野恵理子・藤井康之・榎下達也・古山典子・嶋田由美・西島千尋
2. 発表標題 生活史の中の音楽と音楽教育
3. 学会等名 日本音楽教育学会第53回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 教科教育学として教育課程の基準（学習指導要領）をどう分析・評価するか 「カリキュラム経験」研究の視角
3. 学会等名 教科教育学コンソーシアム第2回シンポジウム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 生涯学習の視点からみる学校音楽経験の意味 学校音楽の「語り」と分析
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会（宮城教育大学 オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 榎下達也・多賀秀紀・小山英恵・笹野恵理子
2. 発表標題 音楽科教育の実践研究を問い直す
3. 学会等名 日本音楽教育学会第52回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 学校音楽の「カリキュラム経験」 生徒の「教科経験」の意味付与
3. 学会等名 日本教育学会第79回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 学校音楽を「学ぶ」ことと「教える」ことの諸相(6) 教師の学校音楽カリキュラム経験
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 学校音楽のカリキュラム経験 学校音楽はどう経験されるか
3. 学会等名 日本音楽表現学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 日系人の音楽アイデンティティ
3. 学会等名 日伊文化研究会(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eriko SASANO
2. 発表標題 School Music Curriculum Experiences of Japanese Children: As seen through a statistical analysis of questionnaires
3. 学会等名 ISME 34th World Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 個人誌としてのカリキュラム 学校音楽のカリキュラム経験
3. 学会等名 第3回近現代教育史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笹野恵理子
2. 発表標題 学校音楽を「学ぶ」ことと「教える」ことの諸相(5) 「経験されたカリキュラム」の視角から
3. 学会等名 日本音楽教育学会第49回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Eriko SASANO, Michiko KAN, Yukari YAMAZAKI
2. 発表標題 A Study of Inclusive Music Education in Elementary School: The Perspective of “Universal Design for Learning” in School Music Curriculum
3. 学会等名 International Scientific Symposium on “Development The Support Service System on Inclusive Education for Persons with Disabilities: International Experiences and Lessons Learnt for Viet Nam” (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 笹野恵理子編著 磯田三津子、上野智子、櫻下達也、菅道子、金ヒョン淑、佐藤真由子、多賀秀紀、松本晶代、山崎由可里、吉田奈穂子、吉田武男著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 NSK出版	5. 総ページ数 137
3. 書名 教科融合型教材の開発とカリキュラム・デザイン	

1. 著者名 石崎 和宏 ・ 中村 和世編著（笹野恵理子）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 227
3. 書名 『初等生活科教育,初等音楽科教育,初等図画工作科教育,初等家庭科教育,初等体育科教育,初等総合的な学習の時間（新・教職課程演習）』	

1. 著者名 宮崎明世, 岩田昌太郎編著（笹野恵理子）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 221
3. 書名 中等音楽科教育,中等美術科教育,中等家庭科教育,中学技術分野教育,中等保健体育科教育,高校情報科教育,中等総合的な学習/探究の時間（新・教職課程演習, 第21巻）	

1. 著者名 笹野恵理子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 多賀出版	5. 総ページ数 384
3. 書名 学校音楽の「カリキュラム経験」 潜在的カリキュラムの生成過程	

1. 著者名 齊藤忠彦・菅裕編著（荒巻治美・石川裕司・石出和也・笹野恵理子他）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 253
3. 書名 新版中学校・高等学校教員養成課程 音楽科教育法	

1. 著者名 初等科音楽教育研究会編（有本真紀・石井ゆきこ・石上紀子・笹野恵理子他）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 255
3. 書名 小学校教員養成課程 最新初等科音楽教育法2017年告示「小学校学習指導要領」準拠	

1. 著者名 中等科音楽教育研究会編（笹野恵理子）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 240
3. 書名 『中学校・高等学校教員養成課程用 最新中等科音楽教育法 2017/2018年告示「中学校・高等学校学習指導要領」準拠』	

1. 著者名 吉田武男監修・笹野恵理子編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 『初等音楽科教育』（Minervaはじめて学ぶ教科教育第7巻）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://sites.google.com/view/peterandthewolfcurriculumguide/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0
URL

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
イタリア	ミラノ音楽院			